

# 新庄女学校における「自学自動」の教育実践

—日本女子大学校出身者の教育活動を中心に—

**Educational Practices “Self-Initiated and Self-Educated” at Shinjo Girls’ School  
—On Educational Leadership by an alumni of Japan Women’s University (JWU)—**

長 野 和 子

**Kazuko NAGANO**

(日本女子大学学術研究員)

## 要 約

本稿では、1909年に広島県山県郡新庄村に創設された私立新庄女学校（現・学校法人広島県新庄学園広島新庄高等学校）が、地域に受容され発展した過程を日本女子大学校出身者による「自学自動」の教育実践と、その背景としての地域の実情や地方改良運動に着目して考察する。

新庄女学校は農村的女性の育成と女性教員の養成を目的として誕生した。創設に際し主任教師として招聘されたのが、日本女子大学校卒業直後の豊留アサであった。豊留は二年後には校長となり、日本女子大学校の「自学自動」の教育を継承しつつ地域の実状を加味した教育実践を行い、新庄女学校の発展に寄与した。

その背景には地方改良運動の展開があった。地方改良運動では、教育を受けた女性を必要とし、新庄女学校への期待は大きかったと推測できる。都会からきた豊留に対する抵抗はあっても、「自学自動」の教育実践は地域に受け入れられ、新庄女学校の発展につながったと考えられる。

## [Abstract]

---

In 1909, Shinjo Girls’ School (later Hiroshima Shinjo Senior High School) was established at Shinjo Village of Hiroshima Prefecture. This study analyses the process how the new school was accepted at the agricultural village in Hiroshima under the strong leadership by a chief instructor Asa Toyotome who had just graduated from JWU.

She introduced three new systems. Those were Dormitory system, Kakari(Group)system, and Shaon (Contribution to local daily life). Her core educational activities were based on her own experiences cultivated in JWU days. “Self-initiated and Self-educated” system was newly arranged and introduced under the difficult circumstances.

The development of Local Improvement Movement at that time increased the demand of education for girls in rural area. This study focuses on the movement from the standpoint of women’s education.

---

## はじめに

1909年、広島県山県郡新庄村（現・広島県山県郡北広島町新庄）に私立新庄女学校（現・広島新庄高等学校）が、地元の有志により設立された。新庄村は、県北地域の島根県県境に近い戸数504戸、人口2,358人の「山間の一小村」である<sup>1</sup>。新庄女学校は、農村的女性の育成と農村

の小学校の女性教員を養成することを目的として誕生した。

新庄女学校の設立に際し、主任教師として招聘されたのが日本女子大学校国文学部を卒業したばかりの豊留アサ<sup>2</sup> (1880～1938)であった。当時としては最先端の女子教育を受けた豊留は、赴任から二年後には校長となり、その後24年間にわたり校長、名誉校長として、日本女子大学校において学んだ「自学自動」<sup>3</sup>を基盤とした教育活動を展開させた。新庄女学校は豊留校長の下、実科高等女学校を経て1922年に高等女学校に昇格する<sup>4</sup>。

本稿は、明治末期に新庄村に創設された私立女子中等教育機関が、地域に受容され発展した過程について、「自学自動」の教育実践と地域情勢等との関連性に着目して考察するものである。女子中等教育機関の発展の過程を、教育実践や地域情勢等との関連から考察した点が本稿の特長である。

女学校、高等女学校については多数の先行研究があるが、高等女学校教育史を制度改革の視点から総合的に研究したのものとして、水野真知子『高等女学校の研究—女子教育改革史の視座から—(上・下)』<sup>5</sup>がある。この中で水野は、教育制度改革の議論では触れられることのなかった問題点があったことを指摘する。例えば1920年代の「農村における女子の離村」<sup>6</sup>という社会問題である。本稿では制度上の議論では触れられることが無かった同種の問題を、農村の女学校の教育活動から検討する。

次に地方女子中等教育機関の新設発展過程についての先行研究に絞ると、以下の論考がある。まず梶井一暎「近代日本農村における女子中等教育機関の存立基盤—中黒瀬村の土肥実科高等女学校・高等女学校をめぐる—」<sup>7</sup>を挙げる。梶井は既存の女子中等教育史についての先行研究の主要関心は「学校内の問題として教育の営みにおかれ、本稿が有するような地域の状況との関わりの視点は鮮明ではない」<sup>8</sup>とし、特に「農村の様相は明らかではない」<sup>9</sup>とする。中黒瀬村は広島県中南部に位置し、私立土肥実科高等女学校・高等女学校は1916年から9年間「農村本位ノ教育」<sup>10</sup>を掲げ、中黒瀬村に所在した。梶井はこの間の経緯を主として中黒瀬村当局側の資料から検討し、農村事情が学校の存立と密接に関連することを明らかにし、「本事例は、女子中等教育機関が農村に存立した実験的な事例として位置付こう」<sup>11</sup>と述べている。

次に、高木雅史「1920年代における地域社会の女子中等教育機関設立要求—町立刈谷高等女学校の設立と県立移管をめぐる—」<sup>12</sup>を挙げる。高木は、刈谷高等女学校が町立高等女学校として設立された事実を「良妻賢母思想といった国家イデオロギーの普及浸透ということよりも地域固有の設立要求が反映していたのではないかという仮説に対する一つの事例」<sup>13</sup>として提示する。

また、富士原雅弘は、「地域からみた女子中等教育の普及拡大過程に関する実証的研究—宮崎県高鍋実科高等女学校を事例として—」<sup>14</sup>において、実科高等女学校の普及拡大過程を設置理由から考察し、実科高等女学校の「地域のニーズに柔軟かつ迅速に対応可能な設置形態」<sup>15</sup>が、女子中等教育の普及拡大に大きな役割を果たしたことを明らかにした。

梶井の問題関心は、本稿と共通するものである。しかし土肥実科高等女学校・高等女学校は、既存の実科高等女学校を中黒瀬村が招致したものであり、村に所在したのはわずか9年間である。梶井も述べているように「農村本位ノ教育」がどのようになされたのかも明らかではない。女子中等教育機関が農村に存立した一つの事例として十分であるとはいえないのではないか。高木も

富士原も、女学校の設立理由における地域要求の重要性に着目しているが、設立された女学校が実際に地域に受容されたか否かについての視点は十分ではないと思われる。

本稿は、1909年に新庄村に新設された私立女学校を事例とし、東京から主任教師として招聘された豊留が、24年間にわたって行った教育活動が地域に受容される過程を地域情勢とともに複合的に検討しようとするものである。

資料として、新庄女学校については『山県郡報』、『山県郡教育誌』を中心に用いる。新庄女学校での豊留の教育実践については『創立七十周年 新庄学園史』、『創立百年 新庄学園史』、『たかね 第四号 豊留校長先生追悼号』<sup>16</sup>、『家庭週報』<sup>17</sup>を中心に用いる。

## 1. 新庄女学校の誕生

### (1) 新庄女学校設立

日露戦争後の不況で農村は疲弊し、新庄村もその例外ではなかった。農業を主業とする新庄村の住民一人あたりの工作面積は一反(0.1ha)にすぎず、一戸あたりの収入は県内平均所得の7割という水準であり、村民の生活は大変厳しいものがあつた<sup>18</sup>。しかし新庄村はかつては安芸吉川氏の所領であり、吉川元春が日野山城(現・北広島町新庄)を本拠地とした16世紀後半から数十年間は、「遠く鎌倉時代より培われてきた室町の地方文化は、(中略)、この中国山地の奥深くに見事に咲き誇っていた」<sup>19</sup>という歴史的背景を持つ。村民の農村復興への思いには強いものがあつた。

そうした中1908年4月に明治政府より吉川元春に正三位を追贈することが決定され、その記念事業として新庄尋常高等小学校長であつた武田収三<sup>20</sup>(1875～1945)は、女学校の設立を主張した。武田は35名の賛同者を得るが、この35名は新庄村や近隣の有力者で、「農村復興の強烈な意志」<sup>21</sup>を持っていた。後に新庄村村長<sup>22</sup>となる人々を多く含み、ほとんどの人々が新庄学園の校主、理事、幹事等を務めその後の学園の発展に寄与した。賛同者たちは各自資金を拠出しこれを女学校の設立資金とし、女学校設立に向け動き始める。

しかし女学校設置認可についての県との交渉は、当初は困難なものであつた。「田舎に女学校を設立するという事と、亦其主任として日本女子大卒生を聘用するといふ事とに関し呵々大笑して曰く、日本一のハイカラ学校である、日本女子大卒生の卒業生を其教育主任に聘用して、しかも其目的は農村を好愛し、尚是が指導開拓に任ずる婦女の教養にあるとは、何と其教導者と其目的との不合理不格好なる事よ」<sup>23</sup>と、山間僻地での女学校の設立と都市の女子高等教育機関卒の教員着任に対して懐疑的な姿勢であつた。その後の交渉の結果は詳らかではないが、1909年4月に新庄女学校の設立は認可された。

一方、新庄女学校に対し山県郡と新庄村からは、創設時より補助金が出された<sup>24</sup>。新聞には「山県郡新庄村私立新庄女学校は、(中略)、本年四月より郡費の補助を下付せらるゝに付基礎一層堅固となる」<sup>25</sup>という記事が掲載された。『山県郡報』によれば、1911年に300円、1914年に450円、1915年に250円、1918年に150円が「私立学校補助費」「私立新庄女学校教員給料中へ補助」として支出されている<sup>26</sup>。このような「継続的な補助は当時異例」<sup>27</sup>なことであり、豊留も学校の維持費について「創立当時は殆ど全く有志者の出金のみを以てやっと思つて其場を凌いで参りましたが

昨今は郡村の補助金も増額せられさしたる困難も感じない程になりました」<sup>28</sup>と述べている。

女学校を設立し農村的女性や農村の学校の女性教員を育成することが、農村復興の重要な方策と捉えられ、山県郡や新庄村から新庄女学校への財政的援助を引き出したと考えられる。新庄女学校は、私立でありながら郡や村の大きな期待を背負って誕生したといえる。次にこのような背景をもつ新庄女学校の教育目的を検討する。

## (2) 二つの教育目的—「農村的婦女の教養」「女性教員養成」—

新庄女学校の教育目的の第一は「農村的婦女の養成」<sup>29</sup>である。「農村的婦女」とは、落ち着いて物事を行い、確かな意志を持ち、質素で物事に懸命に励む女性を意味する<sup>30</sup>。新庄女学校が、「農村的婦女」を養成する根拠は、農村の婦女が都会で学ぶと、派手で空想的となって確かな志を失い、一生を誤るからである<sup>31</sup>。以上からは、地域の女性は地域で育てるという強い意志を見ることができ、都会の教育は農村の実状に合わず、農村の教育とは相反するという当時の認識が示されている。

教育目的の第二は、「農村的小学校教員」の養成である<sup>32</sup>。当時、農村は疲弊し山県郡全体の財政状態は悪化していたが、これに加え山県郡には山間の僻地であるという地政学上の問題も存在した。この二つの問題が、山県郡出身の教員の多くが他郡で奉職し、山県郡の小学校教員が不足するという問題を引き起こしていた。

『山県郡報 第十九号』<sup>33</sup>によれば、山県郡が「山間僻地」であり、「物質的待遇」が十分でないことが原因で、山県郡出身の教員の多くが他郡で就職するとある。特に女性教員の不足は深刻で、山県郡の全女性教員65名の中で、山県郡出身は2名のみであった。しかし、上記の理由から女性教員を他都市から採用することは困難であり、これは山県郡特有の問題であった。ここで注目すべきは、女性教員が不足しているにもかかわらず、女性が教員になるために都会で学ぶ事を否定している点である。

記事によれば、都会で学ぶと「都会の浮華軽佻の風」をまねるような女性となり、故郷に戻って働くも取れないことを誇りとし、華美な衣装をまとい空虚な日々を送る、とある<sup>34</sup>。その上このような風潮は、「独彼等自身に止まらず地方の青年子女に感染し農村的女子の本能を根本的に打破」<sup>35</sup>し、農村にとって何ら利点はないと続く。ではどのような方法で女性教員を養成するかといえば、農村の「子女を教育する女教員は同じく郡部に於ける相当設備の下に修養するを最も適当なり」<sup>36</sup>と結論付けている。郡部の女性は、郡部において教育を受けた女性教員によって郡部で教育を受けることが、最も適当であるというのである。新庄女学校の教育目的の第二が、女性教員の養成となったことの背景には、このような地域の実状があり、都会は農村とは対立する存在で、農村の良き伝統を壊す存在とみなされている<sup>37</sup>。

1909年4月、このような状況の下、日本女子大学卒業直後の豊留アサは、新庄女学校に主任教師として着任する。当時としては「最先端」の女子高等教育を受けた豊留は新庄女学校でどのような教育活動をおこなったのだろうか。

本稿では、新庄女学校における豊留の教育活動を「寄宿舎」「係」「謝恩日」の三方面の実践から検討する。当初女学校を設立した有力者たちは「寄宿舎をまるで下宿屋風に考えて」<sup>38</sup>おり、豊留の赴任前に賄い付きの下宿屋が設定済みであった。豊留は「元來人を作るといふ教育は唯に

規定の授業時間のみを以てその目的が達せられるものではないといふこと殊にかゝる土地柄（生徒の三分の二は寄宿生です）では寄宿教育が最も必用であることを説き私の母校女子大学の寮舎の特色とすること」<sup>39</sup>を唱え、豊留や教師が生徒と寝食を共にする「寄宿舎」制度を開始する。豊留の作った「寄宿舎」では、生徒一人一人が役割を担い「自動的活動」をすることが求められた。これが「係」活動の端緒である。「謝恩日」は生徒と教師と一緒に往く地域への社会貢献、奉仕活動であり、豊留は当初からこのような活動を行っている。豊留の教育活動の特長が最も出ているのが、この三方面であると考えられる。

豊留の教育活動を検討するには、先ず豊留が学んだ日本女子大学校における「寄宿舎」「係」「謝恩日」を検討することが必要であろう。豊留が母校での経験を新庄において生かそうとしたことは、「寄宿舎」設置についての発言からも推測できるからである。

## 2. 日本女子大学校における「学寮」「係」「バザー」

### (1) 日本女子大学校における「学寮」

1907年の「日本女子大学校規則」<sup>40</sup>には、日本女子大学校の寮舎は「普通の所謂寄宿舎と全然趣きを異にし学校教育の一要素」と記されている。寮には舎監を置き、その下に「主婦」が置かれ、上級生が交代で務める。寮での生活は「大体の寮規を定めたるの外は凡て自治に任じて漫りに拘束を加えず（中略）寮生をして各自責任を重んずるの心」を起こさせるとある。寝泊まりを目的とするだけの場所ではなく、寮舎が学生を教育する場所として捉えられている。学生は「主婦」等それぞれの役割と責任を持ち、「自学自動」の「自治」的な運営を行い、主体的に判断をすることを求められた。当時日本女子大学校以外の高等女学校、女子高等教育機関の中では「学寮が学校教育と一体となって教育寮として意識されることはほとんどなかった」<sup>41</sup>と考えられる。また成瀬仁蔵校長は、学寮での生活は「善良なる家庭に模して実行」<sup>42</sup>させると述べている。「国民生活の基礎となるものとして注目」<sup>43</sup>されていた新しい「家庭」の形を学生は学寮において体験することができた<sup>44</sup>。

### (2) 日本女子大学校における「係」

日本女子大学校では「共同奉仕の原則が日本女子大学校学生間に於ける自治生活の組織又機関として、具体的に表現されたもの」<sup>45</sup>が「係」活動であった。「係」組織の「立案、運行の責任は全く学生に委ねら」<sup>46</sup>、「全校の学生は（中略）とにかく孰れか一方面に分属して、その係員となり、その部分の仕事に協力」<sup>47</sup>した。

豊留の回生である6回生は、自分たちの「係」活動と研究の結果を保存して後進の参考とするために、全153頁の『係の報告』<sup>48</sup>という冊子を纏めた。これによると、6回生は三年生になるとすぐに、「全体生徒の指導者たる責任を負ひ、学年の初めに当りて其指導の方法、研究の計画」<sup>49</sup>をたてた。『係の報告』には、それぞれの係の一年間の実践や研究報告、今後の計画などが記されているが、経済係は「経済系の由来」「家庭経済に就きて」「経済と道徳」「時事問題」と題する記事を載せている。「経済系の由来」では、当初は料理係の中の会計係として始まった経済係が、独立した係として現在は学生全体の経済思想の涵養を目的としていること、同時に研究発表活動

もおこない、「家庭経済に就きて」「経済と道徳」「時事問題」はその研究結果の発表概要であることが述べられている。ここからは「生徒の自治機関たる係」<sup>50</sup>が、実際の係活動を研究を経て発表へと昇華させていることが分かる。豊留がどの係に所属したかは不明であるが、六回生として「係」活動の実践と研究、発表を十分に体験したと考えられる<sup>51</sup>。

### (3) 日本女子大学校同窓会・桜楓会におけるバザーと奉仕活動

桜楓会は日本女子大学校の同窓会組織である。1907年4月、桜楓会は初めてのバザーを3日間にわたって開催した。これは「母校生徒の協力を得て」<sup>52</sup>行われ、入場料を徴取する大掛かりなものであった。バザーでは、桜楓会会員、在校生製作の日用品、装飾品が展示即売された。

バザーの収益金は、蔵書を充実させるために日本女子大学校図書館に寄付された。当時の一般的な図書館は男性が使用することを前提とした教育施設であったため、女性が図書館を活用することには大きな困難が伴った<sup>53</sup>。そのため日本女子大学校では、図書館を充実させ、さらに、在学生・卒業生・教職員だけでなく一般の女性も自由に使える図書館として学外者にも開放していた。つまり、バザーの収益金は、広く社会に開かれた教育施設である図書館の蔵書のために活用されていたという点において、桜楓会バザーは「社会の進歩に資する」<sup>54</sup>活動として位置付けられると考える。なお桜楓会の第一回バザーは豊留が二年生の春に開催された。バザーの準備はその一年前から始まり、「生徒一同は、平均毎日一時間の労力を寄付」<sup>55</sup>し出品作の製作をした。豊留は入学早々バザーの準備に取り掛かったことになり、バザーの意味を理解していたと考えられる。

これに加え桜楓会は活発な社会奉仕活動を行っている。1913年には日本で初めて託児所を開設し、「労働者の妻の共稼ぎ」<sup>56</sup>を可能にした。さらに関東大震災の折には上野公園に「臨時救済救護所」や「児童救護部」等を設置し被災者の救済にあたったこともその一例である。

バザーのもう一つの目的は「母校の教育主義」である「学理と実際研究と応用とを結合する」機会を桜楓会会員と在学生に与えることであった<sup>57</sup>。日本女子大学校の教育主義をアピールする機会でもあり、日本女子大学校が教養としての教育だけでなく、教養に基づく「実業教育」<sup>58</sup>をも学生に教授していることを広く社会に周知しようとしたのである。

では三年間の学生生活を学寮で過ごし、初期の日本女子大学校の教育理念と実践を教育課程においても、実生活でも経験した卒業生の一人である豊留は、新庄女学校においてどのような教育活動をおこなったのだろうか。

## 3. 新庄女学校における豊留アサの教育活動

まず豊留の経歴に触れ、その後豊留の教育活動を「寄宿舍」「係」「謝恩日」の三方面から検討する。豊留アサは1880年に鹿児島に生まれ、鹿児島県師範学校女子部を卒業した後、小学校の教師を6年間務めた。1906年、26歳の豊留は、小学校時代の恩師谷山初七郎<sup>59</sup>の尽力もあり、日本女子大学校国文学部に入学する。その後三年間の学生生活を学寮で過ごす。卒業直前の1909年に成瀬校長の呼びかけに応じて新庄女学校の教師となることを決意し、卒業後直ちに赴任した。設立から2年後の1911年には校長に就任し、その後24年間にわたり校長、名誉校長と

して新庄女学校の基礎を築き、1938年58歳で没した。

### (1) 寄宿舎

新庄女学校は、広島県北の島根県境に近い山県郡新庄村に所在することから、他郡、島根県など通学不可能な地域からの入学者も多く、寄宿舎に入る生徒が多数だった<sup>60</sup>。「寄宿舎細則」第一条には、寄宿舎を「学校教育ノ一要素」とし、「家庭的訓練」によって「良妻賢母タルヘキ品性」を養うとあり、第二条には「自奮自修」によって、「家庭同様」の生活を送るとある<sup>61</sup>。新庄女学校においては、寄宿舎は単に寝泊まりする所ではなく「学校教育の一要素」であり、生徒が「自奮自修」によって主体的な判断力を養い、新しい「家庭」の形を学ぶ場所であると認識されていたと言えよう

豊留が寄宿舎において構築しようとした新しい「家庭」は、豊留の日本女子大学校寄宿舎での体験を基盤としたものであったと考えられる。日本女子大学校では、成瀬が米国留学中に体験した「家庭」の概念を寄宿舎に取り入れていた。『成瀬先生伝』には、成瀬が米国留学中に「総ての家族が一定の仕事を負担し、独立自由でありながら（中略）殊に妻君が精神的支柱となって家族を向上的に引きしめている」ことに感銘をうけ、「之を女学校の寄宿舎に応用」と考えた、とある<sup>62</sup>。成瀬が留学していた19世紀の米国では、いわゆる「共和国の母」として、妻・母である女性は、次世代の国民である子供に国家への忠誠を育むことを通して国家を支える役割が期待され、家庭が国家の重要な単位として認識されていた。そうした女性への役割期待や国家における家族の位置づけを見聞してきた成瀬は、「家政が妻の専管事項ではなく、家長の管轄下」<sup>63</sup>にあった前近代的な「家庭」ではなく、女性が主体的に采配する近代的な「家庭」のあり方を想定した寄宿舎の組織や運営方法・教育方法を実践した。「家庭」について豊留が直接言及した資料は管見の限り確認できないが、豊留は在学中の3年間を日本女子大学校の寄宿舎で過ごし、こうした新しい「家庭」のあり方を寄宿舎で体感し、そのことが新庄女学校での豊留の教育実践に大きな影響を与えたことは、十分に推察される。

豊留は寄宿舎組織について「寄宿舎には舎監（学校女教師）を置き、生徒の指導監督に任じ、その下に主婦あり、上級生交代に之に任じ、舎務を掌り、舎生代る代る庖厨洒掃の事に従い純然たる自炊制度なり」<sup>64</sup>と述べる。舎監は置くものの上級生が「主婦」として寮内を統括し、生徒による自炊制度が実践され、寮は生徒によって運営されていることがわかる。また舎監の教育方法については「舎監は単に形式上の監督に止らずして、朝夕示範教導の任に当り、各生徒の個性境遇等を察し、之が開発誘導の努め以て学校教育の主旨に副わんとす」<sup>65</sup>とある。舎監は注的な指導方法ではなく、生徒の個性や育った環境を考え、生徒の能力をひき出すことに努めるのである。

このような寄宿舎経営が地域に受容されるかどうかは、豊留にとって大きな課題であったと考えられる。1912年の『山県郡報』<sup>66</sup>では、新庄女学校の寄宿舎を「団欒の家族制度の下に趣味ある共同生活を営みつつあり」と描写する。また「寄宿舎生活は校則において大体の規則を定めたる外は凡て生徒の自活」に任せるもので、「規則の如きは、（中略）、相互の規約とも云ふべきものにして舎生は各自自律的規約とし遵守」とある。寄宿舎は「家族制度」の下にあり、生徒の「自活」「自律」によって寮が運営されている、と理解されている。「郡報」は「地域を限定し、

密着した行政情報の周知・啓発を可能とするためのメディア」<sup>67</sup>であり、郡が新庄女学校のあり方を受容し、地域に広めようとしていることが確認できる。

こうした豊留による実践は、既述の通り、自らが日本女子大学校で経験したことに強く影響を受けていると考えられるが、高等教育機関である日本女子大学校での経験を中等教育機関に生かすためには、教育段階を考慮しなければならない。豊留は教育段階の違いからくる困難性に直接的な言及はしていないが、豊留の構築した寄宿舎制度をみると、豊留が小学校を卒業したばかりの生徒達が寄宿舎生活を継続できるよう配慮をしていることがわかる。例えば、それぞれの寄宿舎に豊留校長始めすべての女教師が舎監として住み込み、新庄独特の「家」制度の下、一つの家族のように生徒たちと寝食を共にしたことはその一つである。「先生をお父様お母様と思って楽しく」<sup>68</sup> 過ごしたと寄宿生は、述べている。一方日本女子大学校では、それぞれの学寮に寮監を置いたが、寮監は主に寮出身者の中から選ばれ、寮監経験者の多くはその後母校の教授や学長となっている<sup>69</sup>。

では新庄女学校における「家」制度とはどのようなものだったのだろうか。学校の敷地内に数棟ある寄宿舎それぞれには、舎監として女性教師が住み込んだ。豊留校長も生涯を寄宿舎の一室で暮らした。寄宿生は10名ほどのグループに分けられ、そのグループを「家」と呼んだ。「家」は、四年生・三年生が4人ずつ、二年生・一年生が1人ずつの10名を基本とし、寄宿舎は4つか5つの「家」で構成された。四年生の一人が「家」のリーダーとなり「家長」と呼ばれ、「家」は「家長」の名字をとって「〇〇家」「△△家」のように呼ばれた。通学生も必ずどこかの「家」に属し、「家」は学校生活の一つの単位であった。なお通学生も最終学年には寄宿舎に入り、寄宿舎生活を経験した。「家長」の役目は「家」をまとめ、下級生の世話をすることで、「家長」は自身で判断して「家」を運営することを学び、「家長」以外のメンバーは「家」での役割を責任をもって果たした。

また「寄宿舎」全体を采配したのは、最上級生から選ばれた「主婦」であった。「主婦」は各「家」を統括し、来客の取り次ぎ、献立作成、外出外泊の取締りなど、「寄宿舎」の一切を取りしきった。「主婦」は、「家長」の上に立つことで全体を俯瞰しつつより重要な判断を下すことが求められ、責任を持って寄宿舎全体の運営にあたった。

## (2) 「係」

1913年の『山県郡報』<sup>70</sup>は「係」について、「経済、整理、体育の三係を設け全校生徒をして各自希望の部に属せしめ（時に級別とすることあり）自動的活動の方便たらしむ、かくて日常の細事に於て綿密周到なる習慣を養ひ責任を重んじ勤労を貴び以て一致協力質実勤勉の風を養成せんとす、各係には主任一名（上級生）を置き毎学期の初に當りて計画を立て実行方法を講じ学期末に其成績を発表するものなり」と述べている。

「係」を置くのは「自動的活動」の手段であり、生徒自身が学期の始めに計画をたて、学期末にその結果を発表するとある。生徒が主体的に判断し、実行に移し其結果を発表するという「自学自動」の実践を経験することが明らかである。

では、実際には「係」活動はどのように行われていたのだろうか。1928年当時、豊留校長の下「新庄高等女学校では、生徒の自治計画による活動」<sup>71</sup>が活発に行われていた。「係」は「各

家を通じ各学年より学習、体育、農芸、整理等の係を組織し各々職責を分担<sup>72</sup>した。「家」が活動全体の基本となり、「係」の活動は、「自治計画」に基づき行われた。「自治計画」の作成については学生による次のような証言がある。

「三年生が二学期を迎えると『来年最上級生として過ごす一年間の計画をあくまで自分たちで』立て、各自の考えを話し合う。そして実行に移すための具体的な項目を挙げ、次年度の目標を定める。『全体計画』がまとまると、次に全生徒がそれぞれ所属している文芸、経理、体育、農芸の各部門の計画』に移る。『各部の三年生がリードして全体計画に準じて事業計画など』話し合い、次年度の『自治計画』が決定する。新年度には新一年生を交え『自治計画』の発表会が行われ、新四年生は『自治計画』ができるまでの経緯その心構えなどを発表した。」<sup>73</sup>

「自治計画」の作成と実行から、自分自身で考え、判断し、行動することを経験し、物事に積極的に取り組む姿勢が育まれたと推測できる。また創立当初は寄宿舎の中の「家」制度であったが、次第に学校全体の根幹をなす制度となったのは、寄宿舎生の割合が高く、豊留校長始め女性教員全員が寄宿舎で生徒と共に暮らしたことに起因すると考えられる。当時の通学生は「当時は寮生が絶対多数でもあり、また寮生活が全体の訓育の中心にも据えられていた」<sup>74</sup>と回顧している。

### (3) 「謝恩日」

「謝恩日」には、手芸品即売会やバザー<sup>75</sup>が開催された。生徒は手工芸品を販売し、売り上げは「家」ごとに積み立てられた。併せて、生徒教職員が村民や地域のために、布団の打ち直し、着物の仕立て、稲刈りの手伝いなどを行う奉仕活動も行われた。バザーや奉仕活動は生徒が社会に目を向けるきっかけとなり、社会貢献の一環でもあった。

また、このような活動は新庄女学校が地域の生活実態に即した教育を行っていることのアピールの場でもあった。新庄女学校が単なる教養だけではない、農村の日常生活に適應できる教育を行っていることを示し、地域に受容されるための試みであった<sup>76</sup>。

開校から10か月後の1910年2月には、「学芸品展覧会」が催され、バザーが行われている<sup>77</sup>。こうした取り組みは、豊留の日本女子大学校在学中の経験を生かした教育実践といえる。

## 4. 豊留の教育活動の特徴

以上の検討から、豊留の教育活動の特徴を日本女子大学校と関連させて考察する。まず「寄宿舎」に関しては、「寄宿舎を学校教育の一要素とする」という基本方針は一致する。また寄宿舎を生徒の自治によって運営することで、主体的な判断を下し行動に移すことのできる女性を育てようとしている点も共通する。寄宿生が、「主婦」として寄宿舎全体を俯瞰し責任をもって運営することを学んだことも共通している。

一方、「寄宿舎」教育を新庄女学校全体の教育基盤とする豊留の教育実践は、日本女子大学校とは異なる特徴的なものである。特に「家」制度は新庄女学校特有のもので、通学生をも「家」の中にとりこみ、学校全体の制度となった。日本女子大学校でも通学生を寮教育の下においたが、新庄女学校のそれは更に強化したものである。豊留がこの教育実践を旧来の「家」という形を使っ

て行ったことは、豊留が新庄女学校の教育について、保護者や地域の受け止め方を意識した結果であると考えられる。

「係」活動については、全生徒が必ずどこかの係に属し、生徒の「自治」の下に各「係」が目的を掲げ、責任をもって活動し、結果を発表する点は共通している。控えめで自分の意志をもたないことが望ましい、という躰をされた女生徒たちが、自分たちで計画をたて、実行し、発表することにためらいや困難を感じた、という感想も共通している<sup>78</sup>。しかし新庄女学校の「係」活動が実践とそれについての発表であるのに対し、日本女子大学校では「係」活動を基に研究を経て、発表へと昇華させたことは異なる点である。

「バザー」「謝恩日」は、どちらも社会貢献活動、社会奉仕活動であり、生徒への好影響、「実業教育」のアピールという点で共通する。日本女子大学校のバザーと新庄女学校における「謝恩日」活動とでは規模は異なるが、社会との関わりを重要視し地域に貢献するための開かれた活動であったことは共通している。ただ新庄における「謝恩日」活動は、非常に地域密着型である。布団の打ち直しや着物の仕立て、田んぼの手伝いなどを行って、新庄女学校が農村にふさわしい地に足のついた教育をしていると主張しているのである。地域に受け入れられることを強く意識した活動であったといえるであろう。

以上から、豊留は日本女子大学校における教育方針を根幹として継承しつつ、新庄村の実状を加味した教育実践を行ったことが明らかである。創意工夫を伴う「自学自動」の教育活動が、豊留の教育活動の特徴である。そしてこの教育実践を通じて豊留が生徒に求めたのは、社会に目を向け、自分で考え判断し、行動することであった。さらに豊留は新庄女学校の未来について「行く行くは、此学校を中心に一つの模範農村として組織経営」<sup>79</sup>をするという構想を描いていた。卒業生には「先覚者とし指導者として」<sup>80</sup>新庄女学校の主義方針を社会に広める役割も期待されていたのである。

そして注目すべきは、豊留が日本女子大学校卒業生を新庄女学校の教員として招き、「自学自動」の教育実践を継承させることを試みている点である。確認できる範囲では、1913年から1940年までの間に日本女子大学校卒業生8人が新庄女学校の教員となっている<sup>81</sup>。この8名の中の一人は、1935年から1989年までの54年間新庄学園で教鞭を執り、豊留の後継者としての役割を果たした<sup>82</sup>。豊留は「自学自動」の教育を根幹とする教育実践を、次代に継承しようとしていたことが窺がえる。

## おわりに

本稿の目的は、明治末期に広島県山県郡新庄村に創設された私立女子中等教育機関が、地域に受容され発展した経過について、「自学自動」の教育実践と地域情勢との関連性に着目して考察することである。明らかになったことは、豊留が日本女子大学校における「自学自動」の教育方針を根幹として継承しつつ、新庄村の実状を加味した教育実践を行い、地域に受容されたということである。

地域の側には、既述のように女学校を設立し農村女性に農村的教育を与え、農村女性のための女性教師を養成する必要性があったが、さらに国家政策との観点から地方改良運動の影響を指摘

したい。豊留は1913年に「我国近来農村の不振を唱ふるの声漸く高きが如し。今にして之が改善を企つるは実に焦眉の急にして、国家的事業中又最重大なるものたるべし」<sup>83</sup>と述べ、農村を改善することの重要性を強調した。豊留の言う「国家的事業」は、地方改良運動さすとみることができであろう。1908年に「戊申詔書」が發布され、疲弊した農村を改良するための地方改良運動が本格的に始動した。地方改良運動の特長の一つは、「町村の指導層を含めた町村民一般の自発的行動（『自奮』）に依拠して、ないしはそれを方針として」<sup>84</sup>進められたことであり、「町村振興のためには（中略）教育と教化の必要性が一様に強調」<sup>85</sup>されたことである。「町村の指導層」は女学校設立に奔走した有力者たちと重なり、「教化ノ中心」<sup>86</sup>として位置付けられた小学校の校長は、女学校設立運動の中心人物である武田収三であった。また生活改良運動の分野での「自治民育」は、「生活方式の『改良』の指導として展開」<sup>87</sup>された。生活方式を変えるためには、実際の生活に密接に関与する女性の教育が必須であり、地域のために地域で教育を受けた地域の女性が必要である。新庄女学校に大きな期待がかかり、その存在は地方改良運動遂行上でも重要なものであったと推察できる。

都会の教育は農村の実状に合わず、農村の教育とは相反するものとして捉えられ、「都会」からきた豊留や教員に対する非難も存在した<sup>88</sup>。それにもかかわらず、豊留の「自学自動」を基盤とした教育活動が受け入れられた背景には地域の実状と国家政策である地方改良運動の影響があったと考えられる。

#### [註]

- 1 1910年当時。『創立百年 新庄学園史』広島県新庄学園、2010年、2頁。
- 2 アサは、朝子と表記される場合もある。
- 3 日本女子大学校では、「自学自動」は女子がどのような境遇にあっても、主体的な判断を下すことができる資質を養うために、自ら学び自ら行動することであるとされ、自修、自奮、自活なども表現された。『日本女子大学校規則』（1909年）には、「自奮自修の精神を喚起し他の命令を待ずとも進て各自の職分を尽すの良習を養成せ志めんと欲す」とある。校長である成瀬仁蔵は「自奮自修」とは「自分ノ手ヲ以テ足ヲ以テ働クノdeal」とし、これは人に頼らず自ら考え自ら行動するという意味であると述べる。成瀬仁蔵『実践倫理講話 明治三十七・八年度ノ部』日本女子大学成瀬記念館、2009年、15頁。成瀬の女子教育に関する先行研究は以下を参照。中野邦『成瀬仁蔵研究 教育の革新と平和を求めて』ドメス出版、2015年。大森秀子『多元的宗教教育の成立過程 アメリカ教育と成瀬仁蔵の「婦一」の教育』東信堂、2009年。影山礼子『成瀬仁蔵の教育思想—成瀬のプラグマティズムと日本女子大学校における教育—』風間書房、1994年。片桐芳雄「成瀬仁蔵と『女性の領域（Woman's Sphere）』—アメリカ留学で学んだこと—」『愛知教育大学研究報告 67-1 教育科学編』愛知教育大学、2018年、239~47頁、「成瀬仁蔵のアメリカ留学と『女子教育』の出版—日本女子大学校創設へ—」『人間研究第54号』日本女子大学教育学科の会、2018年、3~17頁、「近代日本における個人性（個性）と社会性—日本女子大学校創設者・成瀬仁蔵の所論を手がかりに—」『愛知教育大学研究報告 63 教育科学編』愛知教育大学、2014年、229~236頁。齋藤慶子・渡邊巧「成瀬仁蔵における『自学自動』の教育実践とその意義—女子の生活力改善をめざす取り組み—」『人間研究第53号』日本女子大学教育学科の会、2017年、41~51頁。真橋美智子「成瀬仁蔵の女子高等教育—職業教育の視点から—」『女子の高等教育』日本女子大学女子教育研究所、1987年、98~125頁。豊留、新庄女学校については以下に詳しい。後藤祥子「広島県新庄学園訪問記—成瀬校長の蒔いた種—」『成瀬記念館 2012』No.27、日本女子大学成瀬記念館、2012年、10~13頁。片桐芳雄は、豊留を成瀬の思想を体現した卒業生の一人であると上記論考「近代日本における個人性（個性）と社会性—日本女子大学校創設者・成瀬仁蔵の所論を手がかりに—」において指摘している。

- 4 新庄高等女学校は、計1,444名の卒業生を送り出し1948年に閉校、新制広島新庄高等学校となった。
- 5 水野真知子『高等女学校の研究—女子教育改革史の視座から—』(上・下)、野間教育研究所、野間教育研究所紀要第48集、2009年。
- 6 同上(下)、61~2頁。
- 7 梶井一暁「近代日本農村における女子中等教育機関の存立基盤—中黒瀬村の土肥実科高等女学校・高等女学校をめぐって」『史学研究』255、広島史学会、2007年、73~93頁。
- 8 同上、73頁。
- 9 同上。
- 10 同上、89頁。
- 11 同上、75頁。
- 12 高木雅史「1920年代における地域社会の女子中等教育機関設立要求—町立刈谷高等女学校の設立と県立移管をめぐって—」『福岡大学人文論叢』福岡大学研究推進部、1997年、1781~1804頁。
- 13 同上、1800頁。
- 14 富士原雅弘「地域からみた女子中等教育の普及拡大過程に関する実証的研究—宮崎県高鍋実科高等女学校を事例として—」『教育學雑誌 45巻』、日本大学教育学会、2010年、45~63頁。
- 15 同上、58頁。
- 16 『たかね』は、新庄高等女学校校友会機関誌。第四号は、豊留の追悼号として出版された。
- 17 『家庭週報』は、1904年創刊の日本女子大学校同窓会(桜楓会)の機関紙。編集方針は、卒業生の情報交換と活動の発表の場であること、それに加え卒業生だけではなく広く一般社会に向けて情報発信することであった。中野邦はこの編集方針を以下のように評した。「僅かな卒業生を購読者とするのではなく、日本女性全体の水準をひきあげる媒介となることが視野に入っている」「『家庭週報』年表よせて」平塚らいてう研究会編『女性ジャーナルの先駆け 日本女子大学校・桜楓会機関紙「家庭週報」年表』 社団法人日本女子大学教育文化振興桜楓会、2006年、12頁。
- 18 前掲『創立百年 新庄学園史』2頁。
- 19 同上、3頁。
- 20 武田収三、1875~1945年。新庄村に生まれ、1900年に広島師範学校を卒業。1908年から1919年まで新庄尋常高等小学校校長を務める。新庄女学校や後の新庄中学校設立(1924)の中心人物で、新庄中学校教諭、新庄学園理事等を歴任。1936年から1939年まで新庄村村長を務め、村長辞任後、新庄村分村満洲芭蓮村開拓団長として渡満した。名田富太郎『広島県山県郡史の研究』名田朔郎、1953年。『永遠の生命 宮庄栄三先生追想』広島県新庄学園、1994年。前掲『創立百年 新庄学園史』
- 21 前掲『創立百年 新庄学園史』4頁。
- 22 1910~43年までの6代の新庄村村長4名は、すべて新庄学園の発起人、理事を務めた。
- 23 武田収三『たかね 第四号 故豊留校長先生追悼号』広島県新庄高等女学校校友会、1939年、55~6頁。
- 24 前掲『創立百年 新庄学園史』6頁。
- 25 「新庄女学校記事」『芸備日日新聞』1910年2月1日号、3面。
- 26 『山県郡報』第15号(1911)第49号(1914)第63号(1915)104号(1918)、山県郡役所。『山県郡報』は1909年に山県郡役所により創刊された。
- 27 前掲『創立百年 新庄学園史』31頁。
- 28 豊留朝子「山村の女学校より(四)」『家庭週報三百十号』日本女子大学校・桜楓会1915年。
- 29 「大正四年 私立新庄女学校 学則摘要」『創立七十周年記念 新庄学園史』広島県新庄学園、1979年、22頁。
- 30 同上。
- 31 同上、21頁。
- 32 同上、22頁。
- 33 「小学校教員採用状況」『山県郡報 第十九号』山県郡役所、1911年、19~21頁。
- 34 同上、19~20頁。
- 35 同上、20頁。
- 36 同上。

- 37 「1910年頃の段階では、農村に対して都市はその存在を殆ど無視されていたのである」村上暁信「明治後期から大正にかけての都市と農村の関係の変移—雑誌「斯民」の記事にみる都市・農村観の変移—」『農村計画学会誌 24巻 3号』農村計画学会, 2005年, 174頁。
- 38 豊留朝子「山村の女学校より(二)」『家庭週報三百八号』日本女子大学校・桜楓会, 1915年。
- 39 同上。
- 40 『日本女子大学校規則』1907年(日本女子大学史料集 第五一(二)日本女子大学成瀬記念館, 1999年)
- 41 日本女子大学学寮100年研究会編『女子高等教育における学寮—日本女子大学 学寮の100年』ドメス出版, 2007年, 22頁。
- 42 成瀬仁藏『女子教育』1896年(『成瀬仁藏著作集 第一巻』日本女子大学, 1972年, 118頁。)
- 43 前掲中嶋邦『成瀬仁藏研究 教育の革新と平和を求めて』211頁。
- 44 近代的な「家庭」については以下の論考がある。沢山美果子『近代家族と子育て』吉川弘文館, 2013年。木村涼子『〈主婦〉の誕生:婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館, 2010年。小山静子『家庭の生成と女性の国民化』1999年, 『良妻賢母という規範』勁草書房, 1991年。
- 45 仁科節『成瀬先生伝』大空社, 1989年, 260頁。
- 46 同上, 407頁。
- 47 同上, 261~2頁。
- 48 日本女子大学校生徒代表者藤井初枝編『係の報告』日本女子大学校生徒主任総会, 1909年。1909年4月の第六回卒業式において成瀬はこの冊子について触れ, 六回生が係活動で成果をあげたことを評価している。「我が国家第二次の発展を何によりて遂げんとするか」『成瀬仁藏著作集 第二巻』日本女子大学, 1976年, 958頁。
- 49 同上, 1頁。
- 50 同上。
- 51 『係の報告』の詳細については稿を改めて検討したい。
- 52 『桜楓会八十年史』桜楓会八十年史出版委員会, 1984年, 72頁。
- 53 宮崎真紀子「戦前期の図書館における婦人室について—読書する女性を図書館はどう迎えたか—」『図書館界』53(4)日本図書館協会, 2001年, 434-441頁。
- 54 前掲『桜楓会八十年史』72頁。
- 55 同上, 74頁。
- 56 同上, 93頁。
- 57 「桜楓会バザーの趣意」『家庭週報 九十三号』日本女子大学校・桜楓会, 1907年。
- 58 成瀬は日本女子大学校における「実業的教育」は、文学、商工、手芸、音楽、美術などすべてを含む、工場的社会的並びに家庭的要素を備えたものであるとする。「我校の教育方針に就て 二、実業的社会的教育」『家庭週報 第二号』日本女子大学校・桜楓会, 1905年。
- 59 谷山初七郎(1864~1929)は鹿児島県加治木町出身の教育家。柁城小学校等の校長を務め、豊留は柁城小学校での教え子。98年、第一高等学校教授兼舎監に就任。退任後の1926年に新庄学園の学園長に就任。二見剛史『資料集成 谷山初七郎と加治木』鹿児島女子大学, 1995年。
- 60 寄宿舍生数について詳細な記録はないが、学園史の記載から1912年は全校生徒数の約89%, 1914年は約90%, 1926年は約80%の生徒が寄宿舍に入っていたと推論できる。全校生徒数は女学校・実科高等女学校時代(1909年~22年)が40名~50名, 高等女学校時代(1923~49年)が150名~200名である。前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』。前掲『創立百年 新庄学園史』
- 61 「大正四年 寄宿舍細則」前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』。
- 62 前掲仁科節『成瀬先生伝』116~7頁。
- 63 前掲小山静子『家庭の生成と女性の国民化』21頁。
- 64 豊留アサ「大正二年 寄宿舍状況」前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』18頁。
- 65 同上。
- 66 「私立新庄女学校寄宿舍状況」『山県郡報 第三七号』広島県山県郡役所, 1912年, 26~7頁。
- 67 太田富康「地方改良運動期の郡報—地域情報施策と広報メディア・アーカイブズ—」『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究編 第9号』人間文化研究機構国文学研究資料館編, 2013年, 107~23頁。

- 68 野村イシ「私たちの頃」前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』179頁。
- 69 前掲『女子高等教育における学寮 日本女子大学学寮の百年』161頁。
- 70 「私立新庄女学校生徒訓育状況」『山県郡報 第三九号』山県郡役所, 1913年, 22~3頁。
- 71 前掲『創立百年 新庄学園史』57頁。
- 72 「昭和三年 要覧」同上59頁。
- 73 清水時江「自治の輝き」『喜寿, 豊留, 佐々木, 上田校長時代を偲ぶ』広島県新庄学園同窓会, 1985年, 409~10頁。
- 74 関根薫「通学生と私」前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』190頁。
- 75 横山トヨミ「一年一回バザーを行っていた。手芸品即売会も併せて行っていた」「女学校創立の頃」前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』176頁。
- 76 前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』前掲『創立百年 新庄学園史』参照。
- 77 「山県郡新庄村私立新庄女学校は明治四十二年の創立にして、(中略)、本月十一日より三日間学芸品展覧会を開設して一般の縦覧を許し製作品中日用品は縦覧者の要求に応じ売却すと云ふ」「新庄女学校記事」『芸備日日新聞』1910年2月1日号, 3面。
- 78 新庄女学校卒業生は、教師や生徒一同の前で自治計画書の発表をしたことを次のように述べる「この時のことは今思っても全身が固くなる思いです」黒田一枝「思い出を辿りながら」前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』195頁。一方、大正時代の日本女子大学校卒業生へのアンケートには、以下の回答がある。「家庭では女のでしゃばりとか発表は控え目に育てられた故、一番困難なのは発表の時で(後略)」『大正の女子教育』日本女子大学女子教育研究所, 国土社, 1975年, 191頁。
- 79 豊留朝子「山村の女学校より(六)」『家庭週報 三百十二号』日本女子大学校・桜楓会, 1915年。
- 80 同上
- 81 前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』, 前掲『創立百年 新庄学園史』。
- 82 宮庄ミツヨ。旧姓大倉。1930年新庄高等女学校卒。31年に豊留の強い勧めで日本女子大学校国文学部に進学。卒業後日本女子大学校に職を得たが、豊留の要請により帰郷。35年4月から新庄女学校の教師となり、89年までの54年間新庄学園で教鞭を執った。2004年没。前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』, 前掲『創立百周年 新庄学園史』。
- 83 豊留アサ「大正二年 新庄女学校沿革の概要 本校設立の趣旨」前掲『創立七十周年記念 新庄学園史』16頁。
- 84 笠間賢二『地方改良運動期における小学校と地域社会—「教化ノ中心」としての小学校—』日本図書センター, 2003年, 9頁。
- 85 同上。
- 86 地方改良運動期の小学校は「在村青年層や町村民をも教育と教化の対象とする地方における『教化ノ中心』としての役割」を担っていた。同上, 10頁。
- 87 同上, 88頁。日本女子大学校の教育を根幹とする新庄女学校における「自学自動」の教育実践は、女性が主体的に判断し、自ら考え行動することを「自修自奮」「自活」「自治」と表現した。地方改良運動も「自奮」「自治」「自活」などの用語を用い、自発的に行うことが期待される、という点では共通する。しかしその目的とする所は異なり、日本女子大学校における「自治」を中島邦は以下のように評している。「新教育運動として大正期に盛り上がる教育のデモクラシー化に先駆けて、明治後期に自主・自助の学生による自治組織を作り上げていた」前掲『成瀬仁蔵研究 教育の革新と平和を求めて』401頁。「自学自動」の教育実践を新教育の文脈の中に位置づけたものとして、以下の論考がある。前掲齋藤慶子・渡邊巧「成瀬仁蔵における『自学自動』の教育実践とその意義—女子の生活力改善をめざす取り組み—」
- 88 「大正初期の地域の雑誌・新聞の類には、豊留校長を『あまたの誹謗を耐え忍び』女学校を経営する者と述べられている記事が散見される(中略)『よそ者』の豊留校長らの教師たちが専ら非難の対象となりがちであった」前掲『創立百年 新庄学園』31頁。